

## 第6節 大正時代

### 1 大正時代の繁栄 ～第一次世界大戦への参戦

大正3年(1914)に始まった第一次世界大戦に、日本は日英同盟をたてにドイツの中国権益を狙い参戦した。当初、ヨーロッパからの輸入が減って混乱したが、日本本土への影響はなく、戦争被害が大きかったヨーロッパに代わり、日本が生産拠点となる契機となった。

### 2 大正時代の港湾整備

明治31年(1898)に完成をみた門司港築港工事は、築港というよりも海面の埋め立てでしかないものであった。港湾荷役は、当然、沖に停泊した状態で行われていた。

また、埠頭設備も貧弱で、機械荷役装置が整備されておらず、若松港などには既にあった炭積機なども設置されていなかった。

関門海峡には多くの浅瀬があり、座礁事故も頻発し各方面から改善の要望があり、明治43年(1910)から浚渫工事が順次開始された。

門司港では、大正5年(1916)から6年にかけて東海岸ふ頭の造成が行われ、大正9年(1920)3月に完成した。

大正8年(1919)からは、大正15年完成を目指し西海岸埠頭造成工事が始まった。

この近代的港湾への脱皮のために国費が投入されている。当時、港湾整備は受益者負担であったが、門司港は輸出入品が門司で消費されるものではなく、背域の工業地帯の原料・製品であるという特殊性から国費が投入された。

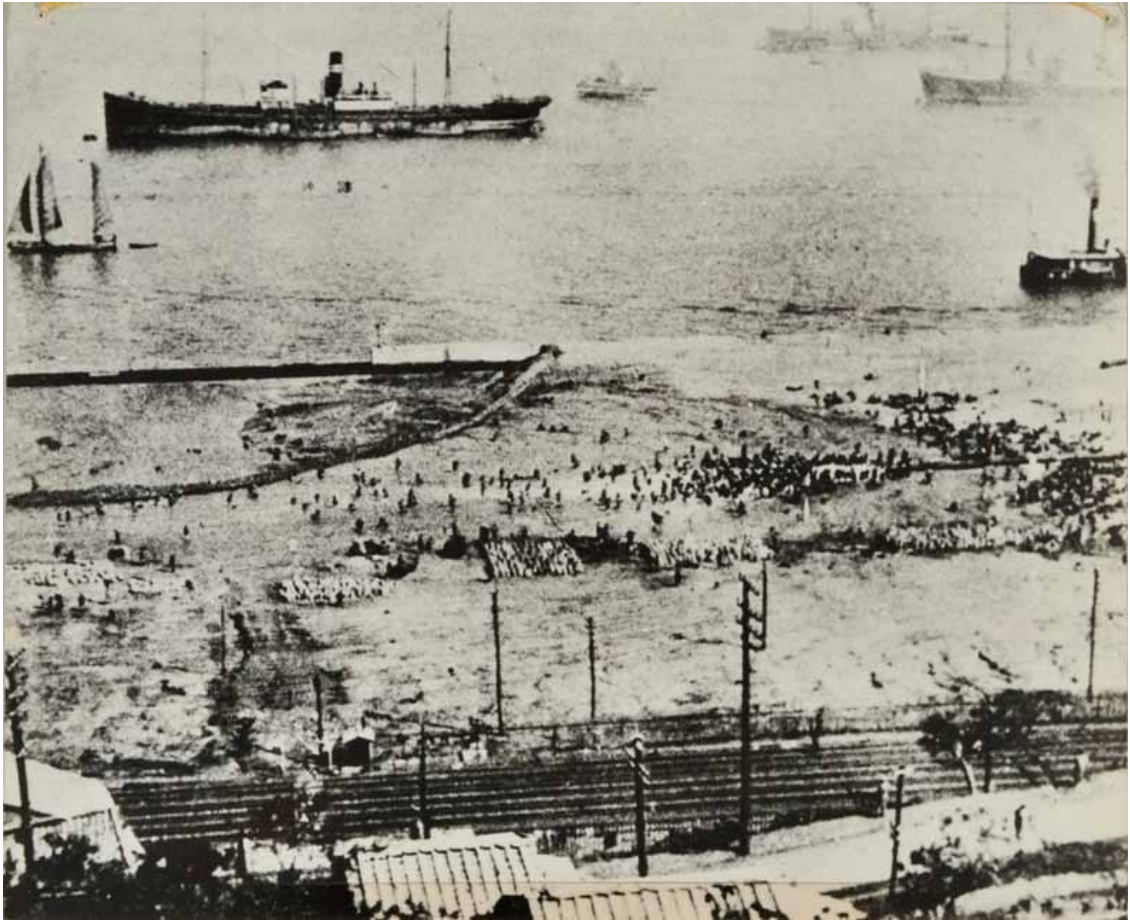
残念なことに、第一次世界大戦後の戦後恐慌などもあって、国の財政にも影響が出て、この工事の完成は遅れた。(昭和6年(1931)完成)

#### 【コラム】大蔵省所管による門司港整備 ～門司税関に大蔵本省の建築部門が併置

大正5年(1916)4月、門司港の東海岸通り外国貿易地帯の埋立等の工事が始まったが、これは大蔵省所管で行われ、門司税関に大臣官房臨時建築課門司出張所が併置され、門司税関長が所長を兼務した。

この工事で、大正6年10月に海面埋立、岸壁及び防波堤工事が完成した。(埋立面積9,290坪)大正6年には東海岸通りの外国貿易上陸設備工事が着工された。この施設は年間35万トンの荷捌きを目標として計画されたもので大正9年3月に完成した。

大正8年(1919)から始まった門司港修築工事では、西海岸通り一帯における繫船岸壁築造、外面埋立などが内務省所管で実施され、9年度からは大蔵省所管のもとで西海岸通り外国貿易地帯の陸上設備工事が始まった。(昭和6年完成)



大正 8 年西海岸地区の工事風景 現在の門司税関庁舎付近の埋立工事

### 3 青島航路開設 ~ 入港船の増加

第一次世界大戦の終結後、青島（チンタオ）にあったドイツの権益は日本に引き継がれることとなり、この地域との貿易が増大し、航路が開設された。

青島航路就航の船名	寄港地
山東丸	~ 門司 ~ 神戸 ~ 大阪
台北丸、宮島丸、薩摩丸、寧静丸、松丸	~ 門司 ~ 宇部 ~ 神戸 ~ 大阪
和田丸	~ 門司 ~ 神戸 ~ 横浜

大正元年（1912）には横浜に次いで全国第 2 位の入出港隻数を誇り、大正 5 年に一度ではあるが全国首位となった。当時の賑わいが想像できる。

【入出港隻数】 単位：隻 「日本関税・税関史資料から」

	大正元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年
門司	4,165	4,609	4,366	4,556	4,974	4,471	5,008	5,413	5,802	5,419	5,264	4,950	5,095	4,870
下関	19	11	8	44	140	188	198	277	290	111	85	49	131	101
若松	870	903	818	720	785	875	998	1,329	1,118	928	870	911	1,088	1,313
横浜	2,367	2,704	2,336	1,952	2,176	2,458	2,624	3,119	3,087	3,121	3,950	3,134	3,997	3,897
神戸	4,677	5,185	4,934	4,585	4,949	4,676	5,147	6,225	6,426	6,650	6,263	6,594	7,000	6,950
大阪	428	566	806	922	901	897	1,063	1,363	1,422	1,736	2,162	2,692	3,402	3,188
名古屋	77	138	215	187	251	233	274	509	458	582	853	1,024	1,250	1,317
長崎	1,945	2,041	1,929	1,551	1,627	1,678	1,369	1,470	1,435	1,162	1,021	1,032	996	1,089
函館	698	649	645	239	684	774	848	879	983	815	1,058	942	753	870

#### 4 大正期の門司港の貿易動向

石炭輸出は次第に減少し、新たな産業の原料が輸入され、製品が輸出されるという構図となってきた。

大正末期には、精糖、セメント、綿織物などが主要輸出品となり、繰綿、肥料（豆かす等）小麦、砂糖（原料糖）などが主要輸入品である。

輸出入ともに品目の多様化が一段と進んできている。

【輸出品目】 単位：万円 「大日本外国年表、門司税関管内貿易趨勢から」

	大正4年	5年	9年	13年	14年
精糖	479	825	1,645	712	630
セメント	140	175	444	229	403
綿織物	43	51	315	361	373
小麦粉	20	42	-	31	355
綿糸	227	241	175	163	150
陶磁器・ガラス製品	105	120	309	101	141
薬剤(化学品)	41	91	87	123	117
印刷料紙				61	87
鉱油	8	51	116	40	56
機械類	3	5	43	25	41
米	95	49	24	22	18
石炭	263	189	355	15	14
その他	436	886	1,166	964	1,008
門司港合計	1,860	2,725	4,678	2,846	3,392
全国シェア	2.6%	2.4%	2.4%	1.6%	1.5%
全国輸出額	70,831	112,747	194,839	180,704	230,559

【輸入品目】 単位：万円 「大日本外国年表、門司税関管内貿易趨勢から」

	大正4年	5年	9年	13年	14年
繰綿	863	1,157	1,982	1,989	2,767
小麦	36	6	404	856	1,194
肥料(豆粕等)	363	253	1,022	1,163	1,167
砂糖	450	656	1,437	216	886
薬剤(化学品)	55	62	125	383	561
米及び粳	1	0	52	514	409
鉄鋼製品	75	217	231	345	321
機械類	109	122	506	628	278
鉄鋼石	7	2	40	108	101
塩	10	19	387	103	81
大豆	11	1	196	88	74
石炭	51	64	473	36	47
その他	290	524	1,053	2,761	1,425
門司港合計	2,320	3,083	7,910	9,190	9,310
全国シェア	4.4%	4.1%	3.4%	0.4%	0.4%
全国	53,245	75,643	233,617	2,453,402	2,572,658

資料により品目の区分けが異なり、品名は厳密には一致していない

貿易相手国は、輸出のほとんどが大陸向けであり、輸入も大陸からのものが3割程度を占めており、中国貿易で栄えていたことがわかる。

【貿易相手国】 「門司税関管内貿易趨勢から」

輸出 (単位:万円)

国名・地域名	大正13	大正14
関東州	623.5	879.6
中国	1,499.7	1,697.3
地域合計	2,123.2	2,576.9
シェア	90.5%	76.0%
香港	245.2	140.6
英国領印度(インド)	122.4	157.5
海峡植民地(シンガポール等)	29.2	110.7
蘭領印度(インドネシア)	74.6	192.4
フィリピン	117.2	60.8
シャム(タイ)	4.0	1.3
イギリス	51.0	41.0
米国	5.3	7.8
合計	2,345.7	3,392.0

輸入 (単位:万円)

国名・地域名	大正13	大正14
関東州	1,546.8	1,425.0
中国	1,242.8	1,037.0
地域小計	2,789.6	2,462.0
シェア	30.4%	26.4%
英国領印度(インド)	1,268.6	1,564.0
海峡植民地(シンガポール等)	97.9	198.8
蘭領印度(インドネシア)	1,161.7	936.4
シャム(タイ)	89.2	210.7
イギリス	432.6	371.7
ドイツ	157.0	258.7
米国	2,114.1	1,899.7
カナダ	215.4	298.5
埃及(エジプト)	42.8	116.7
豪太刺利(オーストラリア)	312.8	683.2
合計	9,189.7	9,309.7

## 5 大正期の門司税関

大正 11 年（1922）に徳山港が開港となり、徳山監視署が徳山税関支署となった。同時期に対馬の豆酛（つつ）に監視署が設置されている。

大正 2 年 10 月	1913	門司税関下関駅出張所設置
大正 5 年 9 月	1916	佐賀税関監視署、伊万里税関監視署設置
大正 6 年 1 月	1917	竹敷税関監視署廃止、船越税関監視署設置
大正 11 年 2 月	1922	徳山港開港指定 徳山税関監視署は徳山税関支署となる 船越税関監視署廃止、豆酛税関監視署設置

【税関の機構】 大正 4 年（1915）4 月、税関分課規程改正

- 税関長官房 - 秘書係、文書係
- 監視部 - 監視係、貨物係、庶務係
- 総務課 - 監査係、徴収係、統計係
- 検査課 - 検査係、鑑定係
- 会計課 - 会計係、用度係、営繕係

（注）大正 11 年（1922）、監視部から監視係を廃止、海務係、陸務係を設置。

管轄対象が内陸地域に拡大

大正 6 年（1917）6 月、税関管轄区域改正により内陸地域も管轄となった。

山口県

福岡県（久留米市、大牟田市、浮羽郡、三井郡、三潁郡、八女郡、山門郡、  
三池郡を除く）

大分県

【コラム】門司税関長が勅任官に

大正7年(1918)6月、第3代門司税関長に着任した古田忠徳氏は、大正10年9月勅任官へと昇格し、大正12年4月まで在籍した。

大正14年に発行された「海峡大観」という本に、同氏は、関門港湾の特質として次のことを列挙しており、現在にも通じる内容である。

- 1 関門は我が国西部の代表的港湾である
- 2 関門は極東交通系統の中心である
- 3 関門は中継貿易港である
- 4 関門は対アジア貿易港である
- 5 関門は対朝鮮貿易港である
- 6 関門は船舶用炭港である
- 7 関門は遠海漁獲物の集散港である



大正4年の門司港～門司市勢要覧より



## 【コラム】産業の勃興 2

### 帝国麦酒

現在の門司駅から赤レンガ倉庫群「門司麦酒煉瓦館」などが見える。大正元年（1912）九州初のビール会社として鈴木商店が創立した帝国麦酒の工場である。

銘柄は「サクラビール」で、昭和4年（1929）に桜麦酒に改称、同18年（1943）大日本麦酒と合併された。

戦後、大日本麦酒は分割され、日本麦酒の工場となり昭和39年（1964）サッポロビールに改称したが、大分県日田市に新工場が完成したことに伴い、平成12年（2000）に工場閉鎖となった。

### 日本製粉門司工場

JR小森江駅付近の海岸沿いに、ニッカの工場のレンガ倉庫が見える。大正元年（1912）鈴木商店が大里製粉所として操業開始した工場の倉庫である。工場は、大正8年（1919）日本製粉大里工場となり、平成7年（1995）まで稼働し、その後、解体されたが倉庫は残った。

「コラム 産業の勃興 1」で取り上げた「関門製糖」も鈴木商店が興した工場である。鈴木商店は、神戸発祥の個人商店で、番頭 金子直吉の多角経営によって爆発的に規模拡大を図り、第一次世界大戦のころには、三井、三菱などの財閥を圧倒して日本最大の商社となった。第一次大戦後の不況、金融恐慌のあおりを受け、昭和2年（1927）鈴木商店は破たんに追い込まれた。

### 出光商会

出光興産の前身である出光商会は、明治44年（1911）門司で石油販売業を始めた。石炭が主流の時代、創業者の出光佐三は、石油の将来性に注目していたようだ。

当初、潤滑油（機械油）の販売を手がけ、炭鉱や工場への販路を開拓し、門司を拠点に国内はもとより、中国大陸へと販路を拡大していった。



大正時代の門司港